

Newsletter

Vol. 15



チュラロンコン大学 - 東京医科歯科大学
研究教育協力センター

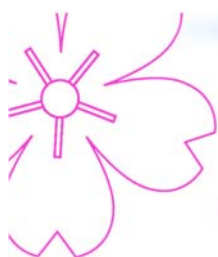


CU-TMDU Research and Education Collaboration Center, Thailand

September 30th, 2020

目次:

① 新拠点長からのご挨拶	1
② タイにおけるCOVID-19の感染症の状況	2
③ タイ歯科医療における「ニューノーマル」	4
④ マヒドン大学とのJDP（国際連携医学系専攻）	5
⑤ チュラロンコン大学とのJDP（国際連携歯学系専攻）	6
⑥ マヒドン大学とのDiscussion Café	6
⑦ シーナカリソウィロート大学とのDiscussion Café	7
⑧ CU保健医療学部からの短期学生受入	8



① 新拠点長からのご挨拶



秋田教授

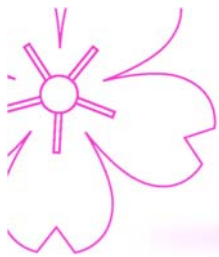
本学のタイ拠点は、これまでの歯学部の長い交流をベースに、川口陽子先生を中心に発展してまいりました。チュラロンコン大学（CU）と本学（TMDU）は1991年に歯学部間で、2002年に医学部間で学術交流協定を締結しており、25年以上にわたる学術交流の歴史があり、現在は大学間協定、CUの保健医療学部や工学部との交流協定も締結しております。このような交流実績に基づき、2010年に本学の海外拠点「チュラロンコン大学—東京医科歯科大学研究教育協力センター（CU-TMDU Research and Education Collaboration Center）」は、2010年11月23日にCU内に開設されました。

また、2018年にはマヒドン大学シリラート病院との医学部間での学術交流協定さらに大学間協定の締結をもとに、シリラート病院とのジョイント・ディグリー・プログラムの開講を目指す中で、本学オフィスTMDU-MU Partnership Siriraj Officeが開所いたしました。

現在、チュラロンコーン大学歯学部ならびにマヒドン大学シリラート病院との間にジョイント・ディグリー・プログラムが開設されており、その他の多くの大学との学術交流も発展しております。そのような中で、タイ拠点のオフィスは本学の東南アジア戦略拠点として重要な役割を果たすものと期待されます。しかしながら、本年のコロナ禍のため、人の往来が難しくなりました。これまで築き上げてきた関係を維持、発展させるためには、タイ国内で活躍する本学の同窓生の絆は重要です。この絆を深めていくような活動を進める必要があります。

国際交流にとって非常に難しい年となってしまいましたが、本学の国際的なプレゼンスの向上のためになる活動を検討し、実行していきたいと考えております。■

✧ タイ拠点運営管理者 臨床解剖学分野 教授 秋田恵一



② タイにおけるCOVID-19の感染症の状況

現在、タイでは新型コロナウイルスの新規感染者は確認されておらず、既感染者が合計3,390人、うち死亡者は58人で、国別感染者数は世界第117位となっています（2020年8月22日現在）。中国・武漢からの旅行者が最も多い国の一つでありながら、タイでこれほど感染者数が少ないのは驚異的です。タイにおける感染第1号は、2020年1月13日に発見された中国人旅行者からの感染です。その後、徐々に感染者数は増加し、3月6日に開催された格闘技ムエタイの試合に観客が集まったことで一気に増加しました。一週間後の新規感染者数は1日に100人を超え、3月26日の緊急事態宣言に至りました。しかし、厳重な措置を継続したおかげで、タイは新型コロナウイルス感染症の抑制に成功したのです。

新型コロナウイルスの感染者数、人口当たりの検査実施件数、対策の有効性等の情報をまとめた世界COVID-19指数（GCI、マレーシアの官民セクターが共同開発した世界の新型コロナウイルス感染状況を示す指数）によると、タイの回復指数は合計82.27ポイントで世界184カ国中1位となり、世界で最もウイルスの抑え込みが進んだ国の一つに位置付けられました。タイで感染抑制が実現した主な理由は、地域、郡、県、地方、中央など多くのレベルに分けて、以下のように厳重な監視体制を敷いたことです。

- 検疫・隔離場所での監視
- 感染の可能性のある人/感染が確認された人の監視
- 医師および医療従事者の監視
- 集団感染者の監視

新型コロナウイルスの検査で陽性判定者が出た場合、その陽性者の治療を行った病院および検査機関は、タイ仏暦2558年感染症法（2015年）に従って、タイ保健省疾病管理局（Department of Disease Control）、緊急オペレーションセンター（Emergency Operation Center）の状況認識チーム（Situation Awareness Team、以下SAT）に報告します。SATはそれを12時間以内にオペレーショングループに報告しますが、主な目的は診断の確定、感染源の特定と接触者の追跡、ならびに感染対策の実行と病気の管理です。

感染が確認された患者さんは詳細な行動履歴の調査を受けます。特に発症前14日間の旅行の有無及び行動と、病院の隔離病室での治療完了後14日間の行動については、それぞれ感染源特定と接触者追跡のため、徹底的に調査されます。患者さんと同じ空間にいた人や物理的に接触した人も調査を受け、接触者についてはハイリスク接触者とローリスク接触者の2つのグループに分けられます。接触者は14日間隔離しなければなりません。接触者は、発熱した場合すぐに疾病調査チーム（Disease Investigation Team）に報告し、徹底的に外出を自粛してどうしても必要ではない限りは自宅待機し、自分自身や周囲

の人々を守るために一日に何度も手を洗ってマスクを身に付け、疾病調査チームから毎日かかってくる電話で健康状態を報告します。

もう一つ、タイで迅速にハイリスクグループを選別して行動追跡を行い、状況を緩和することに大きく貢献したのが、タイ全土で活動する120万人のビレッジヘルスポランテニア（以下VHV）の存在です。この人々は、村健康促進病院（Subdistrict Health Promotion Hospital）のスタッフと協力して1,200万戸以上の家庭を個別に訪問し、情報を提供し、ソーシャルディスタンスを確保する戦略が必要であることを強調しました。リスクグループの選別に基づく行動追跡などを行い、コミュニティレベルで効果的に感染拡大を抑えて予防する必要があることを訴えたのです。タイのVHVが情報、ニュース、各家庭の行動・移動、リスクグループの分類を素早く把握する能力に対しては、WHOも賛辞を贈ったほどです。彼らは新型コロナウイルス感染症による危機からの脱出を支えた無名のヒーローであり、諸外国における感染対策のモデルとなり得る模範的事例でもあります。

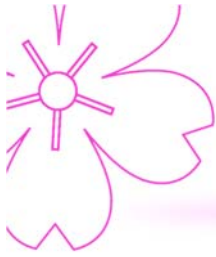
病院では、医療スタッフが感染対策に非常に重要な役割を果たします。テレビ会議システムを使用した外来患者の診断、感染者の陰圧室への収容、PPE（個人防護具）の適切な使用、検査時の仕切り使用といった対策が広く採用されたことが、タイの病院における集団感染の予防に役立ちました。

タイでは、人々への外出自粛要請、在宅勤務の推奨、デパートやレストラン顧客の行動追跡アプリThaichanaの使用、公共交通機関の利用時に乗客間の距離を保つための対策、不特定多数の人々との接触制限の呼びかけなど、新型コロナウイルス感染症に対して数々の対策を講じました。これらの対策は、特に人口密度の高いバンコクでの感染者数減少に効果を上げ、感染拡大に弱い一部の施設は閉鎖されました。医療従事者は今も国、県、郡、コミュニティのレベルで感染症との戦いに備える態勢を崩していません。当局は、当初の検査補助予算が底をついた後、検査予算編成の基準緩和にも踏み込みました。現在は、国民医療保障庁（NHSO）からの予算が出ています。しかし、結局は人々の理解と協力が、新型コロナウイルス感染症の効果的な抑制に最も重要だったと言えます。■

＊マヒドン大学 シリラート病院、外科、低侵襲手術ユニット チーフAsada Methasate



病院の中でのソーシャル・ディスタンス。



③ タイ・ 歯科医療における「ニューノーマル」

新

新型コロナウイルス感染症(COVID-19)パンデミックによって世界が変わり、私たちの生活のあらゆる面はもちろん、歯科医療の面も大きな影響を受けています。

2020年3月23日から、タイのプラユット首相は新型コロナウイルス対策で非常事態宣言を発令し、ウイルス感染予防のため、人々が集う施設のデパートやレストランを閉鎖することを発令しました。最新の政府発表によると、非常事態宣言が9月末まで延長されましたが、現在は全ての業種の営業が再開され、人々は新しい生活様式「ニューノーマル」の日常に順応しつつあります。

現在、タイの感染拡大が一旦収まりましたが、タイ人は社会的距離を守ることやマスクを着用することなどの感染防止策をしっかりと講じ続けています。コロナ後に再開されたチュラロンコン大学歯科病院は「標準予防」に加え、「ニューノーマル」になった新型コロナウイルスへの対策について紹介します。

- ・受診する前に患者の体温を検温し、呼吸器症状の有無や海外渡航歴等について確認する。
- ・処置前に、患者をCOVID-19に対し有効性があるうがい薬によるガラガラうがいをさせる。
- ・ドクターとスタッフは、フェイスシールド・アイソレーションガウンなどのPPE(個人防護具)を着用する。
- ・エアロゾルを発生する処置を行う際に、口腔外のバキュームを使用する
- ・各診療室の定期的な換気を実施する

新型コロナウイルスに負けないように、チュラロンコン大学歯科病院は安全な歯科医療を提供続けています。■

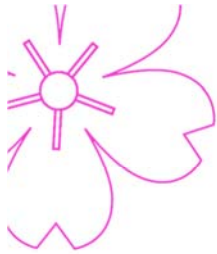
✧ チュラロンコン大学 客員助教 Issareeya Ekprachayakoon



左：院外・院内に実施する換気システム



ドクターとスタッフがPPE を着用する



④ マヒドン大学とのJDP (国際連携医学系専攻)

本学とマヒドン大学が4年にわたって共同で準備を進めてきた「東京医科歯科大学・マヒドン大学国際連携医学系専攻のジョイント・ディグリー・プログラム」は、2019年6月26日に文部科学省から設置が可とされた旨通知を受け、2020年4月に開設いたしました。

本専攻は、外科の専門医の資格を取得した医師のためのものです。がん治療に精通した外科学分野の専門知識を熟知し、医療ニーズの多様化に即応しうるリサーチマインドを持った、日本及びASEAN地域の医学・医療を牽引する高度専門医療人材の養成を目指しています。本学のがん治療に対する高度専門医療人材の養成のノウハウ及び高い研究力、マヒドン大学シリラート病院医学部の豊富な症例数とそれらを基盤とした臨床研究実績を活用し、高度な研究指導や実践的な教育を提供します。本専攻を修了した医師が、日本及びASEAN地域全体にみられる、超高齢社会における医療の高度化及び医療費の低コスト化、医療インフラの整備に伴う高度医療人材の育成、臨床医のリサーチマインドの醸成などといった、共通の課題の解決のため国際的に幅広く活躍することが期待されています。

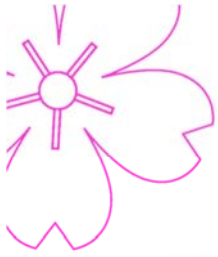
本専攻は、東京医科歯科大学とマヒドン大学がこれまで培ってきた教育・研究交流の実績を踏まえて構想・企画されたものです。本学とシリラート病院医学部との交流は、日本政府奨学金留学生として本学医学部を卒業し、大学院も修了したAsada Methasate先生が、タイ王国へ帰国後シリラート病院外科学教室の教員となったことをきっかけとして始まりました。これを契機に多くの外科医師が本学外科学講座にて研修をしたり、大学院に入学したりしたことで、関係を築いてきました。本学医学部、及び同大学院で学生として学び、また本学附属病院にて研修を受けた経験をもつシリラート病院医学部の教員等の意見を十分に聞き、教育カリキュラムはそれらを反映させたものとなっています。それにより、我が国とタイ王国の大学の高等医学教育や医療機関における専門的外科医療教育のグローバル化を見据え、高度な学術研究を基盤とした教育を展開するとともに、狭い範囲の研究領域のみならず、幅広く高度な知識・能力を身につけることができる体系的な教育課程となっています。

今年は、3人のタイ人医師が入学しましたが、新型コロナウイルス感染症のために、開設式、入学式等が中止となりました。タイとくにバンコクもロックダウンとなり、大学も閉鎖となっていたようですが、学生は病院で働く医師ですので、通常に近い形で病院勤務を続けていたようです。マヒドン大学の授業はオンラインでおこなわれていたようで、タイ側の単位の取得は行えておりますが、本学の授業の状況が十分ではなく、また今後学生が予定通りに日本に来られるかどうかは現在のところ不透明なところです。予定通りのプログラムの進行を目指し、マヒドン大学側とも協議しながら、進めていきたいと考えています。■



2019年夏に、バンコクで行われたジョイント・ディグリープログラムの入学説明ブースで。右から順に、シリラート病院外科のThawatchai Akaraviputh先生、Asada Methasate先生、昨年度統合国際機構長の田賀哲也先生、秋田教授

✧ タイ拠点運営管理者 臨床解剖学分野 教授 秋田恵一



⑤ チュラロンコーン大学とのJDP (国際連携歯学系専攻)



左から：2019年入学のSansanee Wijarn さん、Pornchanok Sangsuriyothai さん、Duangtawan Rintanalertさん。

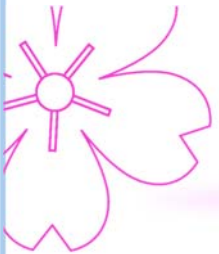
タイ・チュラロンコーン大学と本学とのジョイント・ディグリー・プログラム(JDP)も、早いもので5年目に入りました。2019年に入学した3名の学生は、2020年6月から、例年通り本学の咬合機能矯正学分野及び顎顔面矯正学分野で研究を始める予定でした。ところが、Covid-19の世界的感染拡大に伴い日本への入国が困難な状況になりました。

幸いにして、毎月1回定期的にwebを介して両大学間で開催しているコース管理委員会で協議し、3名の学生が本学において遂行する研究課題の内容確認を行いました。その結果、実験装置

の使用方法の習熟、データ解析方法の理解などをチュラロンコーン大学にて進めることになりました。そのため、本学教員がwebを介して学生とコンタクトを取り、習熟度のチェックや疑問に対する議論と解決など肌理細かい指導を行い、渡日後の研究がスムーズに進むよう準備を進めています。

Covid-19の世界的感染拡大という、これまで予期しなかった状況下においても学修が遅滞なく進むようこれからも適宜対応していく予定です。■

✧ 咬合機能矯正分野 教授 小野 卓史



⑥ マヒドン大学とのDiscussion Café

2020年6月9日(火)18時より2時間、大学間協定を締結しているタイ王国のマヒドン大学の医学部生15名(2年生～6年生)と、本学の学生15名(2年生～6年生)により、「Discussion Café」を開催いたしました。

この「Discussion Café」は、本学および国内外の提携校などの学生が一同に介し、複雑な国際保健問題の解決に向けて、人種や文化的背景、専門分野を超えた交流を通して、英語で徹底的に議論する国際交流イベントです。

今回はじめて、WEB会議システムZoomを用い、距離の壁を越えて実施された「Discussion Café」は、COVID-19によるコロナ禍のため留学を含め海外渡航が出来ない中で、国を超え、人種・文化・分野を超えた、幅広い視点とネットワークを獲得させる稀有な機会となりました。コロナ禍の中、このようなイベントを開催できたことは、通信技術の発展とこれまでの両大学の長年に渡る交流の賜物であり、人種や文化を超えた協働による国際問題解決に対する学生達の情熱と決意によるものといえます。



D-Cafe中の学生の様子



全体セッション (リフレクション)

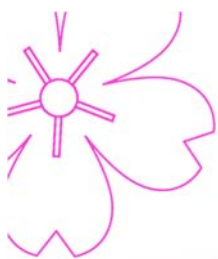
参加した学生は、互いの大学の紹介や自己紹介に続き、6人ごとの2大学混成グループに分かれ、「COVID-19への対応」に関する3つのテーマについて、学生主導で積極的に議論を進め、両大学の教職員が見守る中でプロダクト発表及び全体討論を行いました。

開催後に実施したアンケート調査では、「自分の英語力・スキルを再確認でき、モチベーションが高まった」、「文化の違いを越えた共通点を認識できた」といった学生の声が多く、人の移動を伴う交流が難しくなった現在の状況においても、社会に対する問題意識を高め、視野を広げ

ることができる、海外渡航に代わり得る、非常に価値のある刺激となったと確信できました。

今回のZoom Discussion Caféの成功は、ポスト・コロナ時代に向けた本学の国際交流の在り方を掴むきっかけの一つとして意義深く、更なる発展に向け、今後もより一層検討を重ねていく次第です。■

✧ 統合国際機構 グローバル化推進係



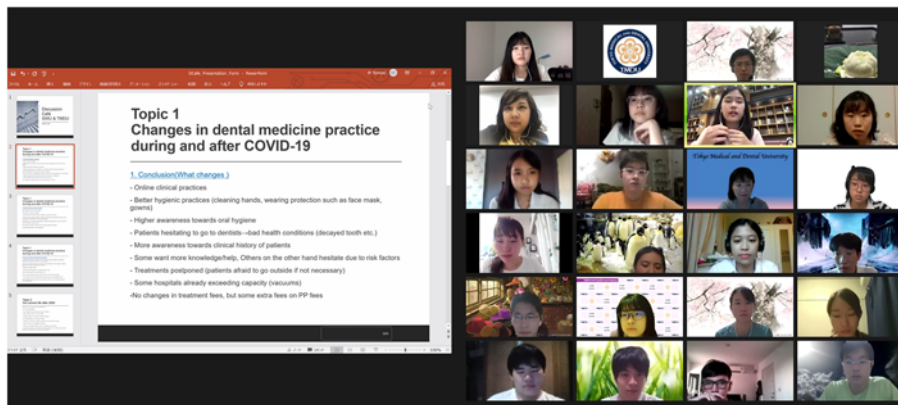
⑦ シーナカリンウィロート大学との Discussion Café

2020年8月26日、日本時間18時30分より2時間、本学とシーナカリンウィロート大学歯学部が集まり、「withコロナ/afterコロナにおける歯科医療」と「withコロナ/afterコロナの大学生活で不要なこと、必要なこと」という2テーマについて、英語で議論をするイベント“Discussion Café”を開催しました。同イベントには本学（医学科、歯学科、口腔保健学科、保健衛生学科）から20名（1-6年生）、シーナカリンウィロート大学歯学部から25名（2-6年生）の学生が参加しました。両大学の教職員やドクターが見守る中で学生主体のグループディスカッションと発表がオンラインで行われました。

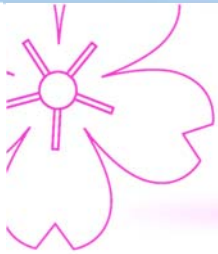
シーナカリンウィロート大学とは毎年海外短期派遣や学生の受入を行なってきました。特に毎年夏期に学生を派遣していましたが、今年度の夏派遣は中止でした。このような状況下においてもオンラインでイベントを開催できたことは、これまでの両大学の交流実績によるものが大きく、タイ王国への派遣や受入が出来ない中での、オンライン“Discussion Café”は両大学にとって大変貴重な機会となりました。

人的移動が難しい今ですが、このような方法で協定校と交流を続けることは大変重要であると考えています。■

✧ 統合国際機構 關 奈央子 助教



グループディスカッション



⑧ CU保健医療学部からの短期学生受入

医学部保健衛生学科とチュラロンコン大学(CU)保健医療学部は2013年11月に学生交流協定を締結して、2014年にCU学生の受入を行って以来、毎年6月から7月にかけて約10日間CU学生を短期受入している。これまでにCU学生52名(学部学生14名+修士学生26名+博士学生12名; 2014-2019年)、教員を受け入れている。本学再生医療研究センター、輸血・細胞治療センター、疾患バイオリソースセンター、医学部附属病院検査部/輸血部/病理部などの大学施設の見学、CU学生・教員による研究セミナー発表、生体検査科学セミナー参加などの行事が行われている。CU学生は個別に検査技術学専攻の分野(ラボ)に配属され、約3日間の研究実習を行っている。参加CU学生の一人は上記の研修後に共同研究のため、約100日間、本専攻のラボで実験を行った。CU学生が生体検査科学系分野に入ることにより、本学検査の大学院生は大きな刺激を受けて、かつ交流を楽しんでいる。■

✧ 分子病理検査学分野 教授 沢辺 元司



再生医療研究センター見学 (2019年7月)



フェアウェルパーティー (2019年7月)

【発行日】 2020年(令2年) 9月30日

【制作】 国立大学法人 東京医科歯科大学

統合国際機構国際交流課総務係 (E-mail: kokusai.adm@tmd.ac.jp)

<http://www.tmd.ac.jp/international/base/thai/index.html>

【本学タイ拠点所在地】

CU-TMDU Research and Education Collaboration Center,
11F Navamaracha Building, Faculty of Dentistry, Chulalongkorn University,
Henri-Dunant Rd. Patumwan, Bangkok, Thailand